

第1部

**マレガ資料群の情報資源化と
マレガ神父研究**

バチカン図書館所蔵マレガ資料群の伝来について

デリオ・ヴァニア・プロヴェルビオ
(訳：原田亜希子・渡辺千鶴)

サレジオ会宣教師マリオ・マレガ (Mario Marega, 1902-78) が日本滞在中に収集し、第二次世界大戦後にローマに送った文書群は、17～19世紀のキリシタン関係文書が大半であり、その数量は1万4600点余に及ぶ。

大名稲葉家の居城 (白杵城) に保存されていた一群の史料について、簡略ながらも最初に紹介したのは、この史料を収集し、「マレガ・コレクション」と命名したゴリツィア (イタリア) 出身のサレジオ会士マレガ神父自身だった。マレガ神父は、1939 (昭和14) 年、創刊されて間もない『Monumenta Nipponica』という上智大学の雑誌に短い記事を發表し、それらの史料のいくつかの特徴を紹介した¹⁾。また、コレクション²⁾のなかの3点の史料については解説を行い、その内容を詳細に検討している。

同じく1939年、彼は1927年末以来、ラテラノ宮殿に置かれた布教・民族博物館 (Museo Missionario Etnologico) の学術機関紙『ラテラノ宮殿年報』 (Annali Lateranensi) 3号に掲載された論文において、8点の史料を解説し、その内容と歴史を紹介している³⁾。論文には史料が白黒写真で掲載されており、史料の現物は、マレガ神父によって1938年にローマに届けられていた。輸送の仲介をなしたのは、当時宮崎の使徒座知牧 (Prefetto Apostolico) を務めていたヴィンチェンツォ・チマッティ (Vincenzo Cimatti, 1879-1965) である (1938年マレガがチマッティに宛てた手紙は後掲史料⁴⁾1)。また、それらの史料の送付先は、マレガ神父本人の述べたところによれば、布教・民族博物館⁵⁾だった。

さて、上述の8点の史料以外の、現在、発見されている史料群に関する最初の情報は、史料群のなかから発見された『続豊後切支丹史料』 (1946年東京にて出版) の裏表紙のマレガ神父自身によるメモ書きである。そこには「オリジ

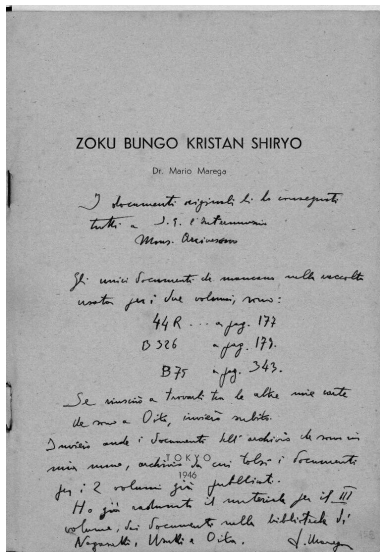


写真1 マレガ神父によるメモ

ンニ・バッティスタ・モンティーニ (Giovanni Battista Montini) である。そこには以下のように書かれていた。

親愛なる閣下。サレジオ会の宣教師であるマレガ神父は、日本の初期キリスト教徒の迫害に関する公文書を収集し、そのすべてをバチカン図書館に寄贈すべく、教皇台下に謹呈することを望んでいます。東京在住のイタリア大使の温かいご助力により、⁸⁾ 教皇公使は、ジェノヴァー横浜間に新たに開通した航路の最初の船舶に載せて、上掲の文書とその他何冊かの書籍を輸送することができました。閣下に宛てられたのは、2つの大きな箱と1つの中くらいの箱です。

- 1) 簡単な作りの長持には、すでに目録作成の済んだ文書が入っています。目録番号は専用のノートに記載されています。
- 2) ブリキが内に張られた長持には、まだ目録作成の済んでいない文書が入っています。ただし、すべての文書は紙製の袋のなかに収納されており、それぞれの袋には中身が記載されています。出生記録やそれに

ナルの資料はすべて教皇公使大司教閣下 (S. E. l'Internunzio Mons. Arcivescovo) にお渡ししました⁶⁾』とある (写真1、日本語翻訳は後掲史料2を参照)。

1949年3月22日から教皇代理使節 (福音宣教省の職員) を務め、1952年4月28日に教皇公使に任命されたのはマクシミリアン・ド・フルステンベルグ (Maximilien de Furstenberg, 1904-88) という人物であったが⁷⁾、1953年8月14日、この人物の命を受けた教皇公使秘書ジェームズ・R・ノックス (James R. Knox) は、東京にてある報告をしたためた。そしてその報告の宛先は、未来の教皇パウルス6世、当時国務長官代理を務めていたジョヴァンニ・バッティスタ・モンティーニ

類した記録（死亡記録を含む）などがありますが、それらは、キリスト教徒の子孫のみでなく、臼杵のすべての住民に関する史料です。さらに戦前に写された大分（府内）の古地図も入っています。

- 3) 中くらいの箱のなかには、ブリキの小箱が2つ収められており、それぞれにマレガ神父の著作に使用された史料が含まれています。また、報告書665番に示された書籍、すなわちジョセフ・シブタニ（Joseph Shibutani）神父が準備した日本語資料「Introductio in Sanctam Scripturam」および「Archaeologia Biblica」も同封されています⁹⁾（翻訳全文は後掲史料3を参照）。

1953年12月18日、モンティーニ猊下は、当時バチカン図書館館長であったベネディクト会士アンセルモ・M・アルバレダ（Anselmo M. Albereda）に送った手紙につぎのようにしたためている。「東京の教皇公使から送付され、館長殿宛に届いた3つの箱は、それぞれ気を付けて保存しておきます」（翻訳全文は後掲史料4を参照）。

12月23日、アルバレダは返信する。そこで、件の3つの箱がバチカン図書館に無事届けられたことを伝え、また「バチカン図書館の蔵書に資料と図書を加えるための、しかるべき手続きを行った」と述べている（翻訳全文は後掲史料5を参照）。

以上の史料群に関連して、1954年4月3日および5日、教皇公使マクシミリアン・ド・フルステンベルグはアルバレダに手紙を書き送っている。そこには、『続豊後切支丹史料』第1巻に加¹⁰⁾え、マレガ神父が教皇公使に送付した手紙の抜粋が添付されていた。抜粋はつぎのようなものである。「イタリアに送付された史料を印刷した日本語版書籍の第1巻についてですが、これを貴殿にお送りすることを東京にて約束しました。この書籍には、使用された史料一つ一つの目録番号が振られています。また、これとは別にお送りする書籍のなかには、各ページに使用された史料の目録番号を手書きで添えました。こうすることで、ローマにて原文書の閲覧を望む者が、それぞれの文書が印刷されている箇所を特定することができるようになるでしょう。私は、すでにこの書籍のイタリア語版も用意しているのですが、これを『ラテラノ年報』に送付して出

版してもらうか、直接バチカン図書館にお送りするか、決めかねています」(翻訳全文は後掲史料6-1、6-2を参照)。

館長アルバレダは5月15日に返信し、彼の心遣いと熱心な働きぶりについて感謝の意を伝えている。ところが、マレガ神父の質問に対しては困惑した様子がうかがえる。というのも、アルバレダ氏が述べるには、「今のところ、その書籍の出版に関するいかなる情報も私には届いておりません」(翻訳全文は後掲史料7を参照)というのである。

こうしたやりとりの最後に、フルステンベルグは、1957年12月6日付の手紙(後掲史料8)と『島原の乱』(1637年)という題名の著書を、アルバレダに送っており、アルバレダは、1958年1月31日、フルステンベルグに返信し(当該通信文書の翻訳全文は後掲史料9を参照)、同時にマレガ神父にも謝状を送っている(当該通信文書の翻訳全文は後掲史料8を参照)。フルステンベルグ曰く、『島原の乱』は「ここで語られる出来事に参加した1人の武士によって語られ」たものである(翻訳全文は後掲史料10を参照)。この書物はその後、当時バチカン図書館の司書を務めていたドミニコ会士マリー=イヤサント・ローラン(Marie-Hyacinthe Laurent, 1906-68)の手で、バチカン図書館の蔵書に加えられることになる(資料番号Vat. estr. or. 57)。そのことを示すのは、ローランの手によって書簡の余白に書き添えられたメモである。そこには、1958年6月18日と日付が振られている(後掲史料8)。

マレガ神父によって収集された史料の膨大なコレクションは、整理を待っている間、一時的に保留されていた。ところが数年後、その保留状態はより安定したものとなって膠着¹¹⁾してしまい、コレクションは1964年12月まで図書館のなかで眠っていた。1965年に整理されていない史料の調査が行われ、上述のローランがいわゆるケースAを作成した。それ以降、マレガ神父の史料はそっくりそのままの配置を保って忘れ去られてしまったのである。そして、47年の歳月を経た2011(平成23)年3月、マレガ文書はついに甦ることになった(21袋への収納はそのときになされた)。

註

- 1) M. Marega, E-fumi, «Monumenta Nipponica», 1939, Vol.2 No.1, pp. 281-287.
- 2) マレガが紹介した史料に記される番号は、No. 99-T (写真つき)、320 (写真つき)、105-T である。
- 3) M. Marega, Memorie cristiane della regione di Oita, «Annali Lateranensi», 3, 1939, pp. 9-59, 史料No. 288A。299、302、303、304、309、32-T。
- 4) マレガ資料 A26.1.1, マレガ神父から、教皇との謁見のためにローマに滞在していたチマッティに宛てられたと考えられる手紙。関連史料に添えられて伝えられた。後掲史料1を参照。また、バチカンによって作成された関連のメモ書も見られる (マレガ資料 A26.1.0)。
- 5) M. Marega, Memorie cristiane, cit., p. 21; Id., *Documenti sulla storia della chiesa in Giappone. Gli editti di persecuzione del 1619. Testi e note critiche*, «Annali Lateranensi», 14, 1950, pp. 9-50. このなかで、もうひとつの史料No. 324 (地元のキリスト教徒迫害の布告、1613年)を布教・民族美術館に寄贈したことを明示している (p.17)。同様のメモはマレガ文書のなかのとくに史料A9.2.18.1, A9.2.19.1にも見られる。
- 6) マレガ資料 A12。
- 7) 1933年9月15日に教皇庁代理に任命されたパオロ・マレッラ (Paolo Marella) の後任として。
- 8) 当時任命されたばかりであったブラスコ・ランツァ・ダイエタ (Blasco Lanza D'Ajeta, 1907-1969)。
- 9) 1951年と1852年、長崎にて。それぞれR. G. Bibbia. V.1254, 1255の整理番号にて受け入れられた。
- 10) 1954年5月18日にRiserva. III. 74の分類番号にて受け入れられる。表紙にはマレガ神父の自筆のメモで「オリジナル史料はローマにある」と記されている。
- 11) Cp. P. Vian, «Il Dipartimento dei Manoscritti», in, pp. 383-387.

付 録

史料1 マレガ資料 A26.1.1

親愛なる閣下

絵はがきをありがとうございます。こちらはすべて順調ですが、とても暑く、6月の終わりまで雨が続いていました。数日前に体調を崩した修道女が1人、見習い1人とともにイタリアへ戻りました。私は、彼らに10通ほどの文書の入った箱を預けました。そのうちの何通かは良い状態ですが、他の大部分はかびが生えていて、開くことができません。これらはとても古い文書の一部で、ラテラノ博物館で落ち着いて開封する時間があるでしょう。他の文書は解説し次

第お送りします。

お送りした文書のリストをここに示します。

29番の文書は絵踏を行ったことを保証する僧侶の文書で、1852年のものです。49番、同上、1811年。

56番、同上、1838年。

66番から83番は臼杵にあるさまざまな寺の連続した手紙で、絵踏をしたことが書かれている、1844年のものです。66番から83番のこれらの手紙はつながっていて、完成した一つのシリーズとなっています。

上に示した手紙の内容ですが、キリスト教の監視に関する内部報告です。「もし私の寺の信者たちのなかに、キリスト教徒であることが疑われる者がいれば、すぐ城に知らせます。もし私の同意があって隠れている者がいれば、その責任は私にあります。その（村の人口の調査の）ときに、私は絵踏をさせましたが、例外はおらず、報告すべきことはありません」。署名、日付、その手紙の宛先である役人の名前が記されています。封筒には、寺の名前が記されています。ときどき書かれている「カミ」とは当局のことです。

313、314、315番の文書は、民衆よりも上の階級に属していると考えられている侍の手紙であり、彼らは家で絵踏を行い、その通知を城に送ったのです。

この3通の文書の内容ですが、キリスト教の調査の報告書です。「キリスト教に関する法を守るために、家族の皆、男性、女性、奉公人、家臣全員に十字架を踏ませました。報告すべきことは何もありません」。それに続いて、日付、家長と、彼から給料を受け取っているすべての侍の署名、そして宛先である役人の名前が記されています。

317番は前述の名簿です。宗門改、すなわち絵踏のあと、モイ村（森村か）の全家長の印が押された1837年の名簿です。

ここまで挙げた文書は、良い状態のものを選びました。その他の文書はすべて開くことができないほど悪い状態で、キリスト教徒の死とその子孫に関するものです。ローマで落ち着いて調べれば重要なものがあるかもしれません（後欠）。

史料2 マリオ・マレガ『続豊後切支丹史料』（ドン・ボスコ社、1946年）裏

表紙メモ（バチカン図書館所蔵）

オリジナルの資料はすべて教皇公使大司教閣下にお渡ししました。
第2巻のためにまだ集めきれないものは、以下の資料のみです。

44R ... 177ページ目

B326 ... 179ページ目

B75 ... 343ページ目

もし大分にある私の他の書類のなかに、これらの史料を見つけることができれば、すぐにお送りいたします。また、すでに出版された2冊に収録した、地元資料館の史料をお送りします。第3巻の材料はすでに集めており、それらは長崎、臼杵、大分の図書館にある史料です。

マレガ神父

史料3 Biblioteca Apostolica Vaticana（以下BAV）、Internuntiatura
Apostolica, N. 666, Tokyo 14 agosto 1953.

親愛なる閣下

サレジオ会の宣教師であるマレガ神父は、日本の初期キリスト教の迫害に関する公文書を収集し、そのすべてをバチカン図書館に寄贈すべく、教皇台下に謹呈することを望んでいます。東京在住のイタリア大使の温かいご助力により、教皇公使は、ジェノヴァー横浜間に新たに開通した航路の最初の船舶に載せて、上掲の文書とその他何冊かの書籍を輸送することができました。閣下に宛てられたのは、2つの大きな箱と1つの中くらいの箱です。

- 1) 簡単な作りの長持には、すでに目録作成の済んだ文書が入っています。目録番号は専用のノートに記載されています。
- 2) ブリキが内に張られた長持には、まだ目録作成の済んでいない文書が入っています。ただし、すべての文書は紙製の袋のなかに収納されており、それぞれの袋には中身が記載されています。出生記録やそれに類した記録（死亡記録含む）などがありますが、それらは、キリスト教徒の子孫のみでなく、臼杵のすべての住民に関する史料です。さらに戦前に写された大分（府内）の古地図も入っています。

- 3) 中くらいの箱のなかには、ブリキの小箱が2つ収められており、それぞれにマレガ神父の著作に使用された史料が含まれています。また、報告書665番に示された書籍、すなわちジョセフ・シブタニ Joseph Shibutani 神父が準備した日本語資料 *Introductio in Sanctam Scripturam* および *Archaeologia Biblica* も同封されています。

敬意を込めて

教皇公使秘書官 J.R. ノックス

史料4 BAV, Segreteria di Stato di Sua Santità, No. 306945, Dal Vaticano, il 18 Dicembre. 1953.

親愛なる館長殿

東京の教皇公使から送付され、館長殿宛に届いた3つの箱は、それぞれ気を付けて保存しておきます。

ご参考までに、前述の公使の同文書に関する報告書2通のコピーを同封いたします。

同時に、教皇猊下に宛てた届け物が正しく猊下のもとに送られたことを保証します。

敬意とともに。

ジョヴァンニ・バッティスタ・モンティエニ

史料5 BAV, Pro-Segretario di Stato di Sua Santità, Vaticano, 1016/P. 23 dicembre 1945.

親愛なる国務長官殿

18日の閣下の手紙N. 306945への返信として、東京の教皇公使閣下より、資料の入った3つの箱がバチカン図書館に届いたということをお伝えいたします。

同時に、バチカン図書館の蔵書に資料と図書を加えるための、しかるべき手続きを行ったことを閣下にお伝えします。

深い敬意とともに。

※（翻訳者注記）

上記翻訳文の「1945」は、1953年の誤記とみられる。

史料6-1 BAV, Internuntiatura Apostolica, Prot. No. 431/54, Tokyo 3 aprile 1954.

親愛なる館長殿

No. 666/53、1953年8月14日付の手紙とともに、バチカンの事務局に日本の初期のキリスト教徒の迫害に関する収集文書を、バチカン図書館へ送付したことをお知らせしました。この史料はサレジオ会のマリオ・マレガ神父が教皇陛下に献じたかったものです。事務局からは、1953年12月18日付のモンテイーニ閣下からの手紙があり、バチカンに3つの史料の箱が到着したことを知らせてくれました（報告書No. 306945）。

同様の事柄に関して、謹んで館長殿にお知らせしますことには、もう1通の手紙に同封して、前述の史料の日本語版第1巻を、以下に示す、マレガ神父が史料について説明した手紙からの抜粋とともに、館長殿に送りました。

「イタリアに送付された史料を印刷した日本語版書籍の第1巻[※]についてですが、これを貴殿にお送りすることを東京にて約束しました。この書籍には、使用された史料一つ一つの目録番号が振られています。また、これとは別にお送りする書籍のなかには、各ページに使用された史料の目録番号を手書きで添えました。こうすることで、ローマにて原文書の閲覧を望む者が、それぞれの文書が印刷されている箇所を特定することができるようになるでしょう。私は、すでにこの書籍のイタリア語版も用意しているのですが、これを『ラテラノ年報』に送付して出版してもらうか、直接バチカン図書館にお送りするか、決めかねています」

敬意をもちまして、上述のことをご報告いたします。

M・ド・フルステンベルグ

※（翻訳者注記）

上記翻訳文の「日本語版書籍の第1巻」は『続豊後切支丹史料』を指す。

史料6-2 BAV, Internuntiatura Apostolica, Prot. No. 433/54, Tokyo 5 aprile 1954.

親愛なる館長殿

No. 431/54, 4月3日付の手紙に関連して、昨年バチカンに送付された史料に関するマリオ・マレガ神父の書籍を、謹んで送付いたします。

敬意をもちましてご報告いたします。

M・ド・フルステンベルグ

史料7 BAV, Internuntiatura Apostolica, 366/P., Vaticano, 15 maggio 1954.

親愛なる公使閣下

あらためまして、閣下がご配慮と迅速をもって、N. 433/54の手紙とともにマレガ神父の書籍をお送り下さったことに感謝いたします。この本は、日本における初期のキリスト教徒の迫害に関する収集史料を参照するさいに、たいへん有用です。

同様のマレガ神父の質問に対して、私は頭を悩ませているところです。すなわち、「この第1巻に関して、イタリア語版はすでに用意していますが、発表されるように『Annali Lateranensi』に送るべきか、あるいはバチカンに直接送るべきか、どちらに送付するのが良いのかわかりません」。たしかに今のところ、その書籍の出版に関するいかなる情報も私には届いておりません。

重ねて閣下に感謝と敬意を捧げます。

公使フルステンベルグ閣下（宛）

史料8 BAV, Internuntiatura Apostolica, 1366/57, Tokyo 6 dicembre 1957.

親愛なる館長殿

「島原の乱」（1637年）を1冊、ここに同封し、謹んで送付いたします。このタイトルは、ここで語られる出来事に参加した1人の武士によって語られ、まるでその時代にさかのぼったかのようです。この史料を発見した、貴方もよくご存じのサレジオ会のマレガ神父は、この史料をバチカン図書館に寄贈したいと願っています。

寄贈者（マレガ神父）に対する深い感謝の言葉を書き加えさせて頂ければ幸いです。

館長殿への感謝の気持ちを捧げつつ、献身的で深い敬意とともに。

M・ド・フルステンベルグ

(後筆)「バチカン図書館受け入れ

番号 バチカン極東.57

(署名：マリー＝イヤサント・ローラン)

1958年6月18日 』

史料9 BAV, Internuntiatura Apostolica, 102/P., Vaticano, 31 gennaio 1958.

親愛なる公使殿

マレガ神父が発見し、このバチカン図書館に寄贈して下さった17世紀日本の重要な手書き史料を、私にお送り下さったことに関して、深く感謝いたします。

マレガ神父の住所を存じませんので、マレガ神父へ感謝と彼の仕事への祝福をおおくりするための手紙を、この手紙に同封することをお許し下さい。

深い感謝とともに。

公使フルステンベルグ閣下 (宛)

史料10 BAV, Internuntiatura Apostolica, 101/P., Vaticano, 31 gennaio 1958.

親愛なる神父様

東京の教皇公使フルステンベルグ閣下が、貴方が発見し、ご厚意と共にバチカン図書館に寄贈して下さった17世紀日本の手書き史料「島原の乱^{*}」を、送って下さいました。

我々の極東の蒐集文書を豊かにし、貴方の教皇庁に対する深い愛情の証となる、貴方からの重要な寄贈品に感謝いたします。

心からの感謝の言葉と共に、深い敬意をお送ります。

アンセルモ・M・アルバレダより

※（翻訳者注記）

上記「島原の乱」は、マレガ資料中に現存する。資料名は「嶋原実録卷之上写」（A23.9）。なおバチカン図書館登録番号はVat.estr.or.57。

（付記）

付録史料の翻訳は、国文学研究資料館リサーチアシスタント渡辺千鶴が担当した。